

雁の行衛に打見ても

吾古里のなれ衣

故郷

旅路ならねど旅衣

結ぶは今宵初草の

うら珍らしき夜の様を

見せんよすがのなきぞうき

都

見せんよすがのなきぞうき

同じ衾に二人して

懐しき文の御返しに

筆とりかはすはらから

故郷

君が手馴の文机に

ありし面影恐ひつゝ

一夜を千代と語りあかさん

一夜を千代と語りあかさん

都

一夜を千代と語りあかさん

一夜を千代と語りあかさん

御返し文かさはてゝ

恐ぶにあまる母の身を

新年梅

不盡廼舍

霞まがへる

天つさざりの

御空も匂ふ

初日のかげに

霜をあざむく

たゞ一輪の

それよこの花

春べし知らぬ

お正月

事の始めの

お正月

いざ羽子つかん

いもとよ友よ

いざたこあげん

おとよ友よ

軒端の梅は

ささがけぬ

霜に堪へたる

その花の

清くをしく

け高き装ひ

心にかざし

身につちまとい

初日のかげに

かほるらん』

二見か浦

東 久米子

横雲わかれて

今ぞあくる

二見か浦和の

朝のみそら

ほのく句へる

霞わけて

豊さか昇るや

初日の影

七福神

小林 恒子

樂しき天のみ園より

この世の幸をもたして

年の始にはらくと

たからの神の七はしら

降り来ませるよき日を

空ものどかにかまつゝ

たふたき恵とこととはに

かはらぬ春の千代八千代

新年五首

佐々木信綱

船中新年

妻子らと屠蘇の酒くまず五たびの

春にしわひぬ舟の上にして

山上新年

むら山の高きにのほり見さくれは

ひびがしの海初日出むとす

田家新年

都より歸りし子らともろともは

年はきさけをくむわした哉

旅中新年

はかなくも年を迎へてさすらへの

我身かなしき旅すかた哉

書窓新年

ふるき書つみかさねたる文机の

わたりはき清め年を迎ふる